

話し手の意味を決定する主体という想定

三木那由他 (Miki Nayuta)

京都大学

私が離れた席を指差して先に席を取っておくということを意味し、あなたが「ちょっと待って」と言って一緒に席に移動したいということを意味するということのように、誰かが何かをすることで何かを意味するという現象は私たちの生活でありきたりなものとなっている。グライスがその分析を試みて以来、こうした現象は「話し手の意味 (speaker meaning)」と呼ばれ、その成立条件の特定は哲学における (小規模とはいえ) ひとつの分野となっている。この分野のパラダイムをなす流派は、話し手の意味を特有の意図を伴った話し手の行為として捉え、その特有の意図の内容を解明しようとさまざまな提案を続け、「意図基盤意味論 (intention-based semantics)」と呼ばれるようになった。

他方で意図基盤意味論の想定に真っ向から反対する論者もいる。テイラーは意図基盤意味論の論者のひとりであるベネットの著作への書評において、話し手が何かを意味し、それが聞き手に理解されるときには、単に話し手が何かを意図したり、その実現によって聞き手の心理が変わったりというだけではなく、意味された内容は「私たちのもの (entre nous)」という特有の形で共有されなければならないと主張した。クラークは同様の観点から、意味という現象の共同行為的側面に着目し、それを話し手だけでは完結しない、話し手と聞き手の共同体によってなされる行為として分析しようとした。

この二つの流れは話し手の意味を決定する主体をどのように捉えるかという問題に対する二つの解答として捉えることができる。これは話し手の意味という概念の二つの特徴のどちらに着目するかの違いであると言える。話し手の意味という概念には、前理論的なレベルで (1) 話し手の行為として記述できるものである、(2) 話し手と聞き手に共有される何かをもたらす (伝達を成立させる) という二つの特徴が読み込まれている。前者を手掛かりに分析した結果が意図基盤意味論であり、これは後者を無視しているとしてテイラーらに批判された。他方で後者を手掛かりに分析したクラークの見解は、前者の特徴を無視しているとして批判できるだろう。二つの立場は話し手を決定する主体の存在を自明視し、そのうえで分析を行なうが、そうした前提を取る限り、(1) と (2) の両方の特徴を捉えることはできず、結局のところいずれも話し手の意味という概念に掛けられているものを掬いきることができない。

以上の考察から、本発表では意味を決定する主体という想定を捨て、話し手の意味はそれ自体の記号的特徴によって主体なしに決定されるという立場を提案する。